



芸劇dance

橋本ロマンス×サエボーグ『パワーチキン』

構成・演出・振付：橋本ロマンス 構成・演出・美術：サエボーグ

Rom HASHIMOTO x Saeborg POWER CHICKEN

現代の寓話があらわす愛とケアの精神

振付家・橋本ロマンスと現代美術家・サエボーグ。

気鋭の表現者たちの初のタッグとなる新作パフォーマンスが上演される。制作に取り組む2人に話を聞いた。

ダンスやステージングの技術や美学はもとより、独自の世界認識をもとに現代社会を穿つ視点を通して、鋒鋭いノイズが胸をざわつかせる作品を発表してきた橋本ロマンス。コンセプチュアルかつスタイリッシュな構成と演出は、横浜ダンスコレクション2020 新人振付家部門最優秀新人賞を受賞して以来、各界から注目を集めている。

一方サエボーグは、皮膚の延長としてのラテックス製ボディスーツを自作し装着するパフォーマンスにより、家畜やペットなどの生き物と人間が労働とケアを交わす社会実験的ユートピア像を展開。東京で30年以上続くフェティッシュパーティ「デパートメントH」での2010年の初演以来、国内外の国際展や美術館での発表が続き、国際的評価が高まっている。「高校時

代から気になり続けてきたサエボーグさんに自分のプログラムに参加してもらいたくてアトリエに押しかけ、自作コンテの紙芝居を見せながら口説き落としました」とロマンスはいう。

本作ではアーティスト2人は創作と演出に徹し、一般から出演者を募集した。ラテックス製のスーツを着用し、豚や牛などの家畜に扮しパフォーマンスを行う「着ぐるみパフォーマー」のオーディションが制作に先駆けて開催された。「出演者は自己表現をするのではなく、顔の見えない『着ぐるみパフォーマー』として、言葉を超えた関係性を築きます。オーディションではダンスのうまさよりも、ケアの精神を重視しました」とサエボーグ。「ディレクションされた動きだけでなく、自主的に他者に愛を届ける勇氣を持っている方に注目しました」とロマンスも語る。

ステージ上には森と牧場の中間領域のような舞台装置が設置され、雌豚やフンコロガシなどの着ぐるみに身を包んだパフォーマーたちがさまざまな「役割」や「属性」を演じる。人間と動物の長きにわたる関係性をカリカチュアライズしたその光景はカラフルでポップだが、痛快な批評性を孕んだものになるはずだ。

「今回初登場のキャラクターはミューテーションされたパワーチキンで、たくさんの手足が生えた千手観音みたいな着ぐるみです。見せ場のひとつなので、自我を封じられてなおかつ腰の強い人に演じていただきます」とサエボーグは意気揚々と語る。

サエボーグのこれまでの作品では動物たちと観客が直接触れ合う設定が多かったが、本作は舞台と客席という俯瞰的ともいえる距離感となる。「近距離で行う、繊細な関係性を築くことはまた違う、新しいことにも挑戦してみたかったから」とサエボーグ。「劇場機構を生かして、座って観ている観客とステージ上のパフォーマーのあいだに、より緊張感のある関係性を起こせるかもしれない。言葉にならないことを身体だけで表現する展開の中にダイナミズムを生み出せたら」と

ロマンスは意欲的だ。

前作『饗宴/SYMPOSITION』（2024年）では、世界を支配する分断と暴力の構造を暴き出し、若者たちの怒りや不安、閉塞感をエネルギーに変える骨太な作品を発表したロマンス。絶えず抱えてきた自身の反骨にいったん区切りをつけ、みずみずしい姿勢で本作に臨む。「常に命懸けで創作することに誇りを持っています。使命感を諦めないからこそ、パーンアウトせず持続できるやり方を見つけない」とビジョンを語る。

橋本ロマンスとサエボーグ、2つの個性が重なる初のコラボレーションは、ポップな導入と鮮烈な強度を併せ持つことはもちろん、人間の経験値ではままたまらないこの苛烈な世界を生きたための新たな寓話になるに違いない。

取材・文：住吉智恵（アートプロデューサー／ライター）



2月11日(水)～15日(日)
シアターイースト 詳細はP10へ

構成・演出・振付：橋本ロマンス
構成・演出・美術：サエボーグ

出演：岩田柚葉 大貫友瑞 カミュー
河又仁美 今野ゆうひ 佐藤靖子
高橋瑞季 波多野比奈 原知里
廣瀬一穂 マサムネ葵 (鮭スベアレ)
松倉祐希 油井文寧 川合悦史 UNA



Rom HASHIMOTO



© ZIGEN

